
ひとり

たけ10005

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとり

【著者名】

N88887F

【作者名】

たけ10005

【あらすじ】

優は無能だからみんなの足手まとい。だから一人でいる。孤独と戦う男児とそれと向き合う女児の物語。

優君は無能だからみんなの足手まとい。だから一人でいる。

孤独……という言葉を大人が使うけど、小学一年生の私には意味がわからない。

違うの……私は別に優君のこと好きじゃないよ。なんとなく、かわいそりだなあ……って思つて。

でも……みんなは優君に「集団行動とれ」とうるさい。

集団行動とると、冷たい。「足手まとい」と言ひ。

なぜって、優君は本当にドジでバカで、音痴で運動オソチ。

忘れ物をすれば誰かから借りて、返すことすら忘れる。借りた人の顔も名前も忘れる。そして怒られる。

お芝居のセリフを覚えられず、仲間外れにされて、当然上手くいかなかつた責任を追求された。

勉強をすれば、応用問題が解けない。漢字を習えば、忘れる。読みはかるうじてできるけど、前後の内容から推理だつて。将来は探偵にでもなるのかしら？無理よね。

いつもクラスの平均点を下げて、一部のお友達は喜んでる。

歌は、本当にひどい。音程ははずれる。上下のコントロールは無い。ピアニカの鍵盤はシルシを付けてもわからない。私はピアノを習つてるから、わからない理由が理解不能。あ、この場合は優君バカな方かしら？

合唱でいつまでも上手くならなく、やり直しが続いて、男子から文句言われてる。黙つて口パクしたなら、隣の子に「唄えよ」と注意される。

飛び箱は三段飛べないし、逆上がりもできない。

上級生の体育祭で組み体操を見て、みんな優君を見てため息をついた。私は女子だから関係ないけど。

そんな優君を、試しに遊びに誘つた。なにをやらかすのか、楽しみだつたから。

「優、君、遊びましょ」

優君は周りをキョロキョロ見渡す。少し長い髪がまつげにかかるて髪をいじる姿を見ると、スキルさえあればモテるのに。と思つた。神父にでも転職すれば良いのよ。ゲームみたいに。そうすれば、頭も運動オノチも関係ない。

優君は私を不思議そうに見て聞く。

「ねえ、友達帰ろうとしてるよ。前田？ 吉田？ 忘れたけど」

なんだ、そんなことが……

「うん、優君と遊ぶつて言つたんだけど、帰つちゃつた。てへつ」

私は頭をぽつと手のひらで叩く。

優君はおでこに手を当てて、頭を振つた。そして、教室内から窓ガラスに目をやり、手のひらをかざす。なんか、意外にキザだ。

「暑いから、外は嫌だよ。あと、ボールも苦手だから絶対部屋の中ね」

注文が多い。いつそ食べてしまおうか。いや、この場合お話では食べられるのは私だ。たしか作品名は注文の多い……なんたら。

「私の家でゲームしよ」

優君の家に行つたら、お話の通りドレッシングをかけられ美味しくいただかれちゃうわ。。。

「ああ、それならいよ」

「ゲームも下手だつた。

「くそつ……これだから女の子は……」

ちなみに、優君は男の子を使ってる。女の子って私のこと？ やな

感じ。

優君はコントローラーを手放すと、手を後ろに組んで笑った。

「お前、なんか優しいな」

いきなり、変なことを言われた。手加減、バレたのかな？ バカな優君が？ おすまし優君が？ 無い無い。

でも、今笑ったよね？ おすまし優君が。

そんなこんなで、優君が気になつた私は、優君と仲良くなつた。優君はゲームをやりに来るだけかもしれない。だつて優君つたら、一度も家に呼んでくれないんだもん。「何も無いから」つて、一週間が経ち、私は放課後の三割を優君と過ごした。

サッカーゲームを優君が持つて来た。ゲームあつたんだ……

「なんで優君は、ボールが飛んで来るとよけるの？ サッカーにならないじやん」

「よけてないよ」

隣を見ると、口を尖らせる優君。おでこにはバンソウ「ウ。

「違うよ、体育で……その傷、どうしたの？」

相手プレーヤーの動きが止まつた。

「転んだ」

私は、ケラケラ笑つた。

「ドジ」

「うるせー」

優君は、なぜか笑つた。その哀しげな笑顔は、何を意味するのか。私にはわからなかつた。

季節が変わつた頃、職員室に呼ばれた。秋風が吹くから、窓は閉められ、窮屈な職員室がさらに窮屈になる。

先生は、私に優君がかわいそつだからなんとかしてと言つ。なんなの？突然、国語の先生だから、たまにブンボウを使つらしい。忍術……？

後で理解できたけど、その時は家庭の事情があつたとか。

親は離婚。

その後父と暮らしお酒に酔うと「お前は無能、失敗ばかり、何か始めてもやりきれない、ぬけてて完成したプラモデルも無い」と言つ。まるでモラルのカケラも無い父。

ボールが苦手なのは、別に丸いからじゃないらしいことも後で知つた。殴られる気がして、怖いのだ。そういえば、無言で肩や背中を叩くと飛び跳ねて驚くから、からわれた。

先生は脳に異常無いのだから、勉強とか頑張つてみるよう頼んでと言つ。

「最後の授業だから、百点の答案見せてあげたいじゃない?」

「え? 最後?」

それじゃ、もう遊べないの?

「黙つててつて、言われたのだけど……一人じゃ寂しいから。あなた、最近仲良くしてくれてるみたいだし」
私はなんだかわからないけど納得いかなかつた。

「先生がやつて」

「大人を信じない子もいるのよ。自分とは異なる人に恐怖や憧れを感じる」

それこそ納得いかない。

「なんで?」

「児童はわからないと言つけど、例えば大人は子供に戻りたい、子供は大人になりたい。という感じ。大人を嫌いな子もいる。」
わからない。わからないよ。

「だから、頑張らなくて良いから、自分の意思を持つよう説得して。うそついて良いから。だから、お願ひね……」

「なんでウソついて良いの?」

「時にはうそついてても良いの」

「わからないよ」

「とにかく、お話してあげて」

「わかった」

納得はいかないけど、大人の言つことはだいたい納得いかない。いつものことだ。

私は、校庭の木の下で土に飛行機を描いてる優君に声をかけた
「遊ぼーよ」

「いや」

即答だつた。

「なんで？」

「お前、別に楽しくないだろ？」

そんなことない。

「遊び相手なら他にもいるわ」

優君は、飛行機をもう一つ描いた。

「優君、飛行機上手いね！」

「俺とお前の……」

「え？」

優君は空を見た。手を飛行機の形にして、空を一機が飛ぶ。

「ヒマなら、そいつらと遊べば？」

私はムツときて、用意してあつたセリフを言つた。

「勉強不足で成績悪いらしいじゃない。冬休み頑張んなよ」

優君は、目を細めて吐息とも言えない小さな吐息をついた。

「関係ね」。俺、これから すっげー家に住む。王子様になるんだ

！」

優君は、ウソはつかない。初めてのウソだ。本当は施設という所に行く。先生から聞いた。

テレビで観て両親に意味を聞いたら幸せになれるかわからなって、パパは言つた。

先生の言つたことはわからなかつたけど、ウソをつくなら、今だと思つた。

「優君の新しい家、行くからね！ 楽しみだよ！」

悲しく微笑まれた。

去っていく後ろ姿。

これで良かつたんだよね？先生……。

姿が見えなくなると、せきをきつたみたいに泣いた。泣き崩れた。

「いい……わけないじゃない……優君……好き」

礫のよつな言葉が喉から押し出された。

「好き……好きだよ……」

ポロポロとこぼれる涙と言葉は、声にならない声になつて地面上に落ちた。

飛行機の操縦席が、やけに濡れた。一人分、濡れた。

せめてこの子達に飛んでもらおう。大空へ……

(後書き)

優君はみなさんにとってどう映りましたか?の○太みたいですが、中にはいるかも!?

今回は慣れない子供に、個人的に得意な気がする題材をば。とか思つたり。唐突に書きたくなつたのです(笑)

子供の恋愛も楽しいなあ…

ちなみに、少し改稿しました。これ以上は誤字以外は変えない予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8887f/>

ひとり

2010年10月21日22時06分発行